

台湾の日本語文学と台湾語文学

日本の敗戦後台湾の人たちが日本語で創作していた短

歌のアンソロジー『台湾万葉集』は、大岡信が朝日新聞の「折々のうた」で紹介して以来、日本でも大きな反響を呼んだ。たとえば孤蓬万里の「万葉の流れこの地に留めむと生命のかぎり短歌詠みゆかむ」、あるいは文錫煙の「台湾語、北京語、英語、日本語を混ぜて使ひしわが半世紀」(ともに後出集英社版『孤蓬万里半世紀』所収)といった歌は、大岡信が、「日本語を強制的に学ばせられた歴史を持つ台湾本省人の間に、戦後半世紀たってなお多くの短歌作者がいるのを知るのは感動的だ⁽¹⁾」というような驚きとある種の感動をよび、その反響は大岡の予想をはるかに超えた。いま後出孤蓬万里『台湾万葉集』物語』などに拠りながら、『台湾万葉集』出版までのい

きさつをまとめておこう。

『台湾万葉集』の編者孤蓬万里、本名呉建堂は、一九二六年の生まれ。台北二中のころから作歌に手を染め、台北高校で犬養孝の万葉の講義を受けたことがこの道に深入りする契機となった。在台日本人の間では俳句、短歌はなかなか盛んで、多くの句誌、歌誌が発行されていた。各地、各職場に句会、歌会があり、在台日本人のサロンの役割をはたしていたものと思われる。日本時代の末期には、こうしたサロンに出入りする台湾人も現れはじめ、それが『台湾万葉集』にまでつながっている。

呉建堂は四四年に台北帝大医学部に進み、戦後台湾大学医学院に改組されたそこを卒業、以後医学をなりわいとする。戦後も歌作を続けたことについて呉建堂は、

松 永 正 義

「二十代前後になってから学んだ中国語は、どうしても文学的素養となるには、質量ともに不足である。……大陸渡来の外省人に伍して中国文学をやっていくだけの覚悟が湧いてこなかった」、「一九五五（昭和三十）年頃から……」「短い一生のこと、今更中国文学に分け入って苦労を重ねるよりは、外国文学として日本文学をやっているに如かず」といった風気が生れてきた」と説明している。（『台湾万葉集』物語）

吳建堂がそのようにして創作してきた短歌を、世に問う気になっただけか、六五年、吳振蘭の短歌が宮中新年歌会始詠進に入選したことであったという。「今までコンスタントに作歌していても、発表をはばかっていた筆者は、これに勇を得て第一歌集『ステトと共に』の刊行に踏切り、ついで「台北短歌会」を発足させ、季刊「台北歌壇」の創刊にと進んでいった」（『台湾万葉集』物語）『ステトと共に』は、台北高校時代の友人を介して六六年に長崎で刊行したものである。以後七三年の『いのちのかぎり』まで都合五冊の歌集がある。いづれも私家版だろう。また第一歌集出版のころから浅田雅一に師事し『からたち』に入り、また『をだまき』、『武羅佐岐』

『黄鵝』などの日本の短歌会に加入した。浅田は軍人として台湾にいたことがあり、その縁で『からたち』は六五年の創刊と同時に台湾支部を設け、のちこれに倣う日本の短歌雑誌がいくつか出てきた。また吳建堂のように日本の短歌会に入る台湾人も増えてきた。こうした歌人達を糾合して台北短歌会が吳建堂を中心に六七年に設立され、六八年には歌誌『台北歌壇』が創刊された。同誌は九三年までに百十一輯を数え、また七一年から毎年會員の総合歌集として出されている『台北短歌集』は、九三年までに二十二冊が刊行されたという。

台湾経済がテイクオフして高度経済成長へと入っていく年を、劉進慶は六四年のこととしている。⁽²⁾ 中小企業をふくめて日本の資本がどんどん台湾へ入ってゆくようになり、これにともなって売春観光が問題となっていくその出発点である。売春観光をテーマとした黄春明『さよなら・再見』がベストセラーになったのは七三年である。日本の資本が台湾へ入ってゆくにあたって、植民地時代の人脈がものをいったことはよく知られている。台湾人同窓生たちが拠金して昔の日本人の恩師を台湾に招待する「美談」が伝えられるようになったのもこのころかと

思う。六五年という年をわたしたちはそのような文脈の中で考えることができる。

ついでにいえば呉建堂が、「今更中国文学に分け入って苦労を重ねるよりは、外国文学として日本文学をやっていくに如かず」ということばも、あまり性急に一般化して受け取らない方がいいだろう。呉建堂が創作を世に問うことを考えはじめた少し前の六四年に、『台湾文芸』⁽²⁾と「笠」という二つの雑誌が創刊されている。『台湾文芸』

は呉濁流の創刊した新文学の雑誌で、それまで結集の場を持たなかった台湾土着の文学者たちを糾合し、日本時代からの台湾新文学運動の伝統を、七〇年代に開花する台湾独自の文学へと接続した雑誌である。また『笠』は陳千武(二二年生)、林亨泰(二四年生)ら日本時代から文学活動を開始していた詩人たち(呉建堂とほぼ同世代)と、趙天儀、杜国清、李魁賢らもう一世代若い詩人たち(さほど苦労なく中国語を書けた世代)の合作によって、これも台湾土着の詩人たちを糾合して作られた詩の雑誌で、今日の現代詩の基礎を築いた雑誌である。この二つの雑誌はいずれもいわゆる中国語を創作の言語とし、いわば七〇年代以降の文学の基礎を作ったといつて

よく、つぎつぎと若い世代の後継者を育ててきた。これに対して『台北歌壇』は日本語を創作の言語とし、それゆえ後継者は育ちにくかった。いわば正反対の方向にあるともいえるわけだが、しかしいづれも六〇年代の後半に、台湾人の結集の場として設立され、それゆえ商業ベースには乗らず、有志の同人によって赤字を抱えながらボランティア的に運営されてきたという点では、どこか似てはいまいか。

『台湾文芸』という誌名をつけるにあたって、台湾の二字を使うと公安の干渉を招くのではないかという疑義が出され、これに対して呉濁流が、目的とするところは台湾本土の文学を育てることなのだから、台湾の二字を用いなければ雑誌をやる意義もない、とがんばり、『台湾文芸』の誌名に決まったといふ。⁽³⁾この挿話は、呉建堂の「本来ならば『台湾歌壇』であるが、『台湾』の二字を冠すると『台湾独立』のイメージがあつて中華民国政府の忌避に触れる恐れがある。……それで『台北歌壇』にしたのである」(『台湾万葉集』物語)という説明を思い起こさせる。情況そのものは、とりあえず共有されていたのである。

情況が共有されていたばかりではない。『台湾万葉集 続編』(後出)には六二の章に六八人の作品が収められ、それぞれの略伝やプロフィールが付されているが、この六八人のなかで巫永福は、『台湾文芸』や『笠』のパトロンの存在であり、日本時代以来の詩人として『笠』に詩を寄せてもいる。また陳秀喜、黄靈芝、張彦勳の三人は、『台湾文芸』、『笠』の双方にも作品を発表している。『笠』の創刊以来の重要な同人であった陳千武、林亨泰らは、この張彦勳と台中一中以来の文学的同志であった。郭水潭も『笠』に関わっているし、吳濁流らのグループとも近いところにいたはずだ。また本人ではないが吳寿坤の兄吳新榮は『亡妻記』で有名な文学者で、これも『台湾文芸』、『笠』の双方に関わっている。逆に吳濁流は、吳建堂の父と台北師範の同窓だった関係から『台北歌壇』創刊以来その顧問となり、同誌に漢詩を発表していたという。人脈的にも重なりあう部分があるのだ。中国語と日本語というまったく異なった選択のように見えながら、しかし選択した個々の作者たちは案外近いところにいたとはいえないだろうか。いいかえれば、言語の相違やそれともなう文学の方向性の相違はもちろんあ

るが、しかし書くという行為においての共通性もまたそこにはあるように思われるのである。こう考えてくると、日本語と中国語という言語の選択が、いわれているほどに排他的、絶対的な二者択一ではなかったのではないかということ、またその選択が自覚化された、つまり雑誌という形で対外的に明示されたのは六〇年代のことで、日本の敗戦からは一定のタイムラグがあること、の二点は確認しておいていいことだと思われる。

さて『台湾万葉集』物語』によれば、吳建堂は七一年天理の歌誌『山の辺』を知り、同誌にエッセイを寄せはじめた。八一年、それらのエッセイをまとめて、短歌紀行の『文武仁の旅』、短歌評論の『人の心をたねとして』、自叙伝式随筆歌集の『孤蓬万里半世紀』、台湾歌人紹介の『花をこぼして』の四冊を刊行したという。いまわたしの手元には『花をこぼして』しかないが、これは私家版として台北で刊行されている。このうち『孤蓬万里半世紀』、『花をこぼして』の二冊が『台湾万葉集』の上巻にあたることになる。続いて八八年には『台湾万葉集』中巻、九三年に『台湾万葉集』下巻をいづれも私家版として刊行した。

大岡信が朝日新聞の「折々のうた」欄で、冒頭に引いた孤蓬万里「万葉の流れ……」の作を紹介したのが九三年五月九日、以後断続して十九回にわたり『台湾万葉集』下巻の歌を紹介した。大岡はまた九五年三月から十二月にわたり後出集英社版『台湾万葉集統編』の歌を紹介し、九七年九月にも『孤蓬万里半世紀』からの一首を紹介している。大岡の紹介は大変大きな反響を呼び、『台湾万葉集』関係の本がつきつきと出版された。次の四冊である。

① 孤蓬万里編著『台湾万葉集』集英社、一九九四年二月
 ② 孤蓬万里編著『台湾万葉集統編』集英社、一九九五年一月

③ 孤蓬万里編著『孤蓬万里半世紀』集英社、一九九七年九月

④ 孤蓬万里『台湾万葉集』物語』岩波ブックレット、一九九四年一月

①は台湾版『台湾万葉集』下巻に、②は『花をこぼして』および『台湾万葉集』中巻を合わせたものに相当するが、いづれもやや異同があるようだ。

『台湾万葉集』は九六年に菊池寛賞を受賞し、NHK

で放映されたドキュメンタリー「台湾万葉集」命のかぎり詠みゆかむ」は、九六年テレビジョンATP賞を受賞した。もって反響の大きさがわかるだろう。

直接の反響はたとえば九三年五月三日『朝日新聞』朝刊「声」欄の、『台湾万葉集』の作者たちは「一握りの特権階級に限られているようだ」としつつ、その背後に植民地支配の悲劇を見なければならぬとする意見に對して、同じく二八日「声」欄で、台湾出身の日本人が、「今でも家族ぐるみのつき合いをしている」ことを述べながら、「痛ましい政治的恩讐を超えて、和歌の本質に迫り、同じ人間としての哀歎を、ある時は郷愁をすら感じさせるその姿勢こそポエムであり、文化である」と反論しているのに見られる。この二つの議論はともにいわずステレオタイプのもので、それ自身に発展性のあるものとは思われない。またおそらく一般の受け取られかたは、こうした問題はひとまずカッコに入れておいて、黄得龍「殖民の日の面影は正座する我的姿勢に今も残り」(『台湾万葉集統編』)といった歌に、すこしの矜持とすこしの慚愧とをくすぐられながら、むしろ大岡が「各作者に関する同氏(孤蓬万里……引用者)の書いた

略伝が実に興味深い」(『新折々のうた1』)という台湾の人々の生きかたに、身につまされるおもしろさを感じていたのではないだろうか。数ある台湾の文学のなかで、他ならぬ『台湾万葉集』が台湾への入門の役割を果たすことの功罪は、やはり考えてみなければなるまい。

しかしながら『台湾万葉集』が植民地支配の問題の複雑さをあらためて思い起こさせたことは事実だろう。たとえば『読売新聞』九五年三月二〇日朝刊の記事は、『台湾万葉集統編』に触発されて、川村湊や垂水千恵、川崎賢子の業績を紹介するよい文章だ。また大岡信のいいたした日本語人という概念は、旧植民地の日本語文学への視野を開き、黒川創編の『〈外地〉の日本語文学⁽⁵⁾』や垂水千恵『台湾の日本語文学』の出版へとつながっているように思われる。もちろんこれらの業績は『台湾万葉集』のことがなくとも出版されたに違いないすけれどものだが、しかしこの時期にこうした形で出版されたことの背後には、『台湾万葉集』の作った土壌がいくらかは関係しているのではないかと思う。

だが問題なのは植民地支配の問題を想起するそのしかたなのだ。典型的なのは佐佐木幸綱の議論である。⁽⁴⁾ 佐佐

木は「かつての日本が植民地台湾に強要した皇民化運動」を想起しながら、「台湾で短歌を詠み継ぐということはないは、こうした過去を現在に突出させつづけることでもあるわけだから、抵抗は当然、大きい。そういう抵抗を引き受けつつ、短歌を作っている人たちが現にいることを忘れてはなるまい。在日韓国人、在日朝鮮人の短歌にもむろん同様のことが言えよう」と、いちおうの挨拶はしながら、しかしすぐに大岡信がドナルド・キーンを引きつつ吳建堂を日本語人と呼んだことに触れて、「近年は日本語で小説を書くリービ英雄氏等、大岡氏のいう「日本語人」が多くなってきた」として、「短歌や俳句の世界にも、相撲界のように外国人の横綱が出てきてくれないだろうか。……伝統詩が、純血を守るという方向ではなく、多様な作者、多様な発想、多様な感覚を抱き込む方向に展開してほしいとねがっている」という。こうした安易な国際化の発想こそが、佐佐木が「忘れてはなるまい」というそのことを、忘れさせるものではないか。それはまた先に引いた『読売新聞』九五年三月二〇日朝刊の記事が、垂水千恵の仕事について、「国際化の時代を生きる著者(垂水……引用者)は、

邱(永漢……引用者)らの悲劇に、「異文化との摩擦の中で同化と拒絶の間を行きつ戻りつしつ」するうちに生まれる多文化主義の可能性も見てとる。……そこに戦前の「日本主義」への反発を見てとるのは容易だが、「異文化との共生」は、言葉ほど容易ではなからう」と批判する問題でもあろう。わたしもまた垂水の仕事について同様の違和感を持つのだが、ただ垂水の認識は台湾で日本語を教えるという実践の中から生まれたものである点で貴重でもあり、そこに若い世代の植民地認識のプラスもマイナスも同時にあるようにも思う。だが垂水についてはこれ以上は触れまい。問題は佐佐木幸綱である。佐佐木の議論が問題なのは、しかし以上の点だけにあるのではない。より問題なのは、佐佐木が『台湾万葉集』の日本語の問題を、日本との関わりのおかげで見えていない点である。日台関係だから台湾のことがわかるはずもないのは自明のことだし、台湾が日本時代のままにとどまっていたわけではないことも当然である。いまや台湾の戦後は五〇数年、すでに日本統治の足掛け五年より長いのである。わたしたちは先に『台湾万葉集』の形成を、六〇年代後半の台湾の文学情況のなかに

置いて考えてみた。いまもうすこし時間をさかのぼって、あらためて考えてみることにしよう。

日本統治時代末期、日本語の浸透には著しいものがあった。一九四四年現在で初等教育機関の国民学校への台湾人の就学率は、漢族系で七一、一七%、原住民族は八三、三八%に上っていた⁽⁸⁾。こうした教育を通じての浸透の上に、皇民化運動による「国語の常用」の強制もあった。社会上昇の機会を求めて教育課程を上っていくほどに日本語は必須のものとなる。こうして三〇年代頃から、日本語を自己表現の道具とする青年たちが登場しはじめた。一方中国では、一九一一年辛亥革命以後国語の制定が急がれ、二〇年には小学校低学年での国文の授業を国語と改め、それまでの教育の用語であった文言文(国語文)に替えて、白話文(口語文)を基礎とする国語の教育を行うこととなった。白話文はまた二〇年代以降の新文学の発展にもない、徐々に全国に普及、定着していった。台湾でもこの白話文は取り入れられ、抗日運動の中心的機関であった台湾文化協会の機関誌『台湾民報』(のち日刊新聞『台湾新民報』となる)などを通じて一定程度普及していった。だが台湾の青年にとって、教育

を通じて最初に触れる文化的言語は日本語であったし、書籍等を通じての教養の幅も、日本語によるものが主であっただろう。さらに三七年以降公的な出版において日本語以外の言語が認められなくなり、日本語の浸透に拍車をかけた。呉建堂のようにこの間に人間形成を遂げた世代は、その被害をもっとも強く身に受けた世代である。ちなみに文言文や白話文に触れる機会も多く、それを自己形成のうちに繰り込めた上の世代や、はじめから国語で教育を受けた下の世代では、やや事情は異なる。戴國輝は一九一五年当時十五歳未満であったものを上限とし、四五年当時十五歳のものを下限とする世代を、「谷間の世代」と呼んでいる。⁽⁹⁾その中心部分は、植民地支配の傷痕のもっとも深かった世代である。こうした台湾内部の事情をまったく見ずに、ことばとして「皇民化教育」を批判しさえすれば話がすんだような気になっている文章は、たとえそれが植民地支配を批判する文章であろうと、わたしは信用する気になれない。

さて日本の敗戦とともに一夜にして言語の切り替えが行われる。この切り替えに苦しみ、そのためにあたら才能を発揮することもなく生を終えたある助教授のことを、

戴國輝は非常に印象的な筆致で描いている。⁽¹⁰⁾文学者たちも例外ではなかった。日本語から中国語への切り替えに成功した数少ない作家とされる鍾肇政や呉濁流にしてもそうである。鍾肇政ははじめ日本語で書いたものを自ら中国語に訳し、つぎには日本語で考えてそれを頭の中で中国語に直して書き、最後に中国語で考え中国語で書けるようになるまでに、長い時間の努力を要したと語っている。⁽¹¹⁾呉濁流も原稿のほとんどを日本語で書き、発表の段階で中国語にしていた。その理由を氏は、中国語で書く文章が硬くなる、やわらかくふくらみのある文章は日本語でなければ書けない、と話してくださったことがある。あの世代のなかでは中国語に練達なほうだとされていた氏にしてそうなのかという驚きを、わたしはいまでも覚えている。例を挙げればきりもないが、せっかくだからもうひとつだけ例を挙げておこう。先に名を挙げた黄靈芝が、日本語の作品集を出版したさいの序文を、『台湾万葉集続編』に引いている。これを再引用しておこう。「私は、いちおう日本語が分かりかけたところで第二次世界大戦の終結により中国籍に戻ってしまった。現在、自国語で文を書くのにたいへんな苦勞をする。

……一つの言葉を覚え、それをこなすにはほとんど一世代を要する。私が中国語で小説を書くには、日本語で書く以上に、おそらくは十倍以上の労力を要し、そしてたぶん十分の一ほどの効果もあがってはいない。短い人生において、これだけの浪費をしなければならぬ理由がどこにあるのだろうか……」

彼らが言語の切り替えに苦しんだ理由のひとつとして、彼らの第一言語(母語)である閩南語あるいは客家語が、同じ中国語の方言であっても、北方語を基礎とする国語(白話文、標準語)とは、ほとんど外国語と違っていいほどに異なっていることが挙げられる。それと大陸における国語の形成、発展の過程から、台湾が切り離されてあったことが、日本語の問題をより重大化させ、言語の切り替えをより困難にしたと考えられる。だがその結果としての日本語の選択が、中国語の選択とそんなに離れた場所で行われていたわけではなかったこと、また結果的にはそこでの中国語の選択が、台湾文学の後継者を育てていったことは、先に『台湾文芸』や『笠』の例によってみたとおりである。

ところでこうした意味での言語の切り替えを迫られた

のは、台湾だけではなかった。朝鮮の場合も同様である。言語を奪われるとはどういうことなのか、またそこから母語の回復とはどのようなものであるのかを、あざやかに描いてみせた文章に、金時鐘の「クレメンタインの歌」がある。父が使えるはずの日本語を使わないことを歯がゆく思うような「皇国少年」であった金時鐘は、

日本の敗戦によって朝鮮人へと押し戻される。「朝鮮文字ではアイウエオの「ア」も書けない私が、呆然自失のうち朝鮮人へ押し返されていた。私は敗れ去った「日本国」からさえ、おいてけぼりを食わねばならなかった。正体不明の若者だった」。彼がそうした彷徨のなかで、昔よく父と釣りに行った突堤にたたずんでいたとき、突然朝鮮語のクレメンタインの歌を思い出す。「乾上がった土に沁む慈雨のように、言葉は私に朝鮮を蘇らせた。いつときに言葉が私に溢れ、溢れた言葉が渦に解け入り、力ずくで代わりの主人を据えようとする軍政へ向けてなだれを打った」。こうしたあざやかな情景を、「私は私の日本語でもって、実に多くのことを損ねた。父を見過ったばかりか、父につながる「朝鮮」の一切をないがしろにした。「日本語」はそのような形でしか、私に居着く

ことがなかったからだ。同じくらいに父の朝鮮語も、あまりに多くのことを閉ざしたままの言葉であったから、私を開かせないことで私を損ねた」というみごとな自省とともに提出している点で、この文章は出色だと思ふ。こうした過程は台湾にはなかったのだろうか。

金時鐘はしかし軍政に追われて日本へ渡ることによって、日本語で書くことの意味を自らに問いつづけなければならなくなる。そしてその問題は金時鐘だけでなく、在日朝鮮人作家に共通の問題であった。金石範は日本語で書くことの意味について、鉄を溶かして飲み込んでしまふという朝鮮の想像上の動物「ブルガサリ」になぞらえ、「私を食ってしまふ日本語の「日本化」という胃袋を食い破る「ブルガサリ」になりたい」という⁽¹³⁾。日本語で書きながら日本語を食い破り、ねじ曲げてゆくことのない、作家としての自由を構想しているのである。こうした自省は台湾にはなかったのだろうか。

わたしはいまこの問いに答えるだけの用意はないが、ひとつ考えられるのは、戴國輝が⁽¹⁴⁾指摘するように、朝鮮は民族全体が植民地化されたのに対して、台湾は民族の一部が切り離されて植民地化されたことの違いであ

る。朝鮮では日本語の克服はいわば全民族的課題として取り組まれ、そしてその問題は時の経過とともに、在日朝鮮人作家のもとに集約的に残ることになった。だが台湾では日本語の問題は全民族的課題とはされなかった。大陸には敵として中国語が存在していたからである。台湾ではいわば日本語を操る自らを、無として切り捨て、ひたすら大陸の「中国」を学ぶことが強いられたのだ。

国民党は日本時代の教育のすべてを奴化教育として否定し、「中国」をもってこれに替えた。その論理を呉濁流はつぎのようにパラフレーズしている。「本省人は奴化教育を受けている。奴化教育を受けているから、多かれ少なかれ奴化精神を持っている。奴化精神がある以上、国民として精神的に欠陥を有しているということになる。故に祖国の人民と一様に扱わねばいかならないから、ある時期まで被治者として我慢しなければならぬ⁽¹⁵⁾」。この論理は国民党が台湾を国内植民地のごとく扱い、利権あさりのみをこととするのを合理化する論理でもあった。四六年十月、すべての新聞、雑誌での日本語の使用が禁じられ、それまで存在していた日本語欄は廃止された。それもこのような論理によるものだった。それは翌年の

二・二八事件以後の弾圧とあいまって、台湾の知識人たちに沈黙を強いることになった。戴國輝の描いた助教教授の悲劇は、こうしておこったのである。植民地的なもの克服は当然のこととして、しかしそれが主体的に行なわれたのではなく、それを無として切りすて、ひたすら押しつけられた価値を学ぶことを強いられたところに、問題があった。こうして日本語の問題は、克服すべき問題として議論されることなく、潜在することになった。朝鮮の場合に自省として現れていた努力は、台湾では「中国語」に対抗して日本語を、あるいはつぎに述べる台湾語を選び、それで書こうとする努力のなかに、解消されてしまったともいえるかもしれない。だから台湾における日本語の問題は、日本の問題であるとともに、それ以上に台湾の戦後史の問題なのだと思う。

ここで台湾語ということばを簡単に説明しておいたほうがいいだろう。先にもすこしふれたように、台湾の大多数(七十三%強)を占める人々の母語は、閩南語である。閩南語とは福建省一带で話されている漢語の方言閩語の下方方言で、広東省の潮州も閩南語圏に含まれる。台湾には他に客家系(十二%位)の言語である客家語、

先住民族(二%弱)の諸言語があり、これらがいわゆる本省人の言語である。外省人(十三%位)の言語は国語⁽⁶⁾であり、またそれは公用語、共通語でもある。国語は北方語を基礎とする標準語で、大陸の普通話と同じものと考えてよく、普通という中国語にあたる。北京官話、マングリンなどと呼ばれるのも、これである。一般に台湾語という場合は、このうちの閩南語をさすが、のちにふれる台湾語をめぐる議論のなかで、理念的には台湾語は客家語、先住民族諸語を含むべきだという考えかたが出てき、また国語をも含むべきだという議論まであるが、それらを統括する一つの言語はないので、事実上は台湾で話されている閩南語を台湾語という。

台湾語で文学を書こうという動きは、八〇年代後半から起こってきた。それは一面では郷土文学から、台湾文学、台湾語文学というように、台湾文学という概念の变化あるいは深化としてとらえることもできる。

六〇年代までの台湾文学は、理念的には国民党の文芸政策によって、文壇的には外省人作家によって支配されていたといってもよい。それが六〇年代後半ごろから、前記の『台湾文芸』や、尉天聰の主編した『文学季刊』

といった雑誌を舞台にして、台湾の現実を描こうとする文学が興ってくる。七〇年代には、黄春明『さよなら・再見』がベストセラーになったことに象徴されるように、こうした文学が徐々に社会に受け入れられるようになってくる。それは台湾を描く文学という意味で郷土文学と呼ばれた。これに対する国民党側からの批判は、大陸と台湾は一体であり偏狭な地域主義は問題である、現実を描くというのは実は姿を変えたプロレタリア文学の主張ではないか、といったもので、こうした批判に陳映真、王拓らが応えて起こったのが、七七から七八年にかけての郷土文学論争であった。この論争によって郷土文学は文学のあるべき姿として社会的にも受け入れられることとなったが、しかしそのなかには同じ郷土文学派に属する葉石濤と陳映真の違いに表されているような、のちの分裂に至る分岐もはらまれていた。

七〇年代の民主化運動は、社会主義派もしくは統一派の知識人と、独立派的な傾向の強い政治家との、いわば統一戦線のような形で推進されていた。七九年の高雄事件を契機に、民主化が一步前進するのと並行して独立論的な色彩が強まり、統一派は影響力を失っていった。そ

の背景には、世界的な社会主義思潮の凋落や、大陸の開放政策とともにそれ以前の実体が明らかにになってゆき、中国共産党が吸引力を失っていったことがある。民主化の進展にしたがって、台湾の独自性が強調され、台湾意識が強く主張されるようになっていった。文学の動きもまたこうした動きの縮図であった。というより、郷土文学論争が文学の枠をこえて社会的な注目を集めたのは、それが七〇年代の民主化運動を集約し、象徴するような論争だったからである。

高雄事件以後、文学のなかでも台湾本土意識が強調され、郷土文学は端的に台湾文学と呼ばれるようになった。陳映真はこれに対して、台湾における中国文学、第三世界文学としての台湾文学といった概念を対置し、以後台湾文学のアイデンティティーをめぐる論争が、断続的に、形を変えて続けられていくことになるが、民主化⇨台湾化の進展にともない、台湾本土意識論が急速に広がり、受け入れられていった。台湾本土意識の強調はまた、台湾語によるのでなければ、台湾本土意識を真に表現することはできないという至極もったもんな主張につながってゆく。こうして八〇年代後半には、台湾語による文学の

主張が高まっていった。

台湾語文学は、詩の分野がもっとも進んでいる。先に述べた『笠』の同人であった林宗源は、六〇年代から台湾語による詩作を試みはじめ、七〇年代から向陽がこれに加わり、やはり『笠』などに発表しはじめる。七九年には『笠』が、台湾語の詩を検討する座談会を行った。

徐々に関心が高まってきたのだ。宋沢萊の詩集『福爾摩莎(フォルモサ)頌歌』(前衛出版社、一九八三年十一月)は国語で書かれているが、その一部は台湾語でそのまま読めるよう工夫されていた。このころから台湾語による創作がさまざまに試みられるようになっていったが、それに弾みをつけたのが、鄭良偉編の『林宗源台語詩選』(自立晚報社文化出版部、一九八八年八月)だった。鄭良偉はついで「台語文学叢書」の第一冊目として『台語詩六家選』(前衛出版社、一九九〇年五月)を編む。また洪惟仁は黄勁連の台湾語詩集『雉雞若啼』(自立晚報社文化出版部、一九九一年五月)を「台湾詩人集刊」の1として編集刊行した。

編者を待ってはじめて編集されているのは、台湾語の表記がまだ標準化されていないからである。台湾語は書

きことばとしての伝統をほとんど持たないため、漢字で表記できない語をたくさん持っている。おおよっぱにいうとローマ字によるうとするもの、鄭良偉の主張する漢字ローマ字の交ぜ書きによるうとするもの、洪惟仁らのように漢字によるうとするもの、また漢字によって、ローマ字で注音しようとするものなどがあるが、ローマ字の体系をどうするか、どのような漢字を使うかについては、まだまだまちまちである。前記三著はみなまず表記の方法を述べ、語の意味や表記の注をつけてある。表記の標準化が最大の困難であること、また結集にはその問題から試みを始めねばならなかったことがわかる。

一九九一年には林宗源、向陽、黄勁連、林央敏らが、台湾語詩の詩社蕃薯詩社を結成、『民衆日報』はこれと提携して「台湾語文学特刊」を連載しはじめた。その最初の成果が『鹹酸甜的世界』(自立晚報社文化出版部、一九九一年八月)である。『台湾文芸』、『文学界』といった文芸誌にも台湾語のものが掲載され、八九年には台湾語の専門誌『台語文摘』も創刊された。辞書も九一年からの数年だけで数種類も発行されている。後述の台湾語教育開始前後から、急速に標準化へ向けて進み始めて

いることがわかる。

小説では宋沢萊が台湾語で「抗暴个打貓市」を書き、それを自ら国語に訳し、ともに短篇集『弱小民族』（前衛出版社、一九八七年七月）に収められている。小説では標準化の問題が詩よりも重大な問題となるためか、詩ほどの進展はみられないようだ。⁽¹⁸⁾

ところで台湾語の主張は、文学という限られた世界のなかだけのものではなかった。はじめ日本の敗戦当初には、台湾の人々は積極的に国語を学び、中国の戦後再建に参加しようとした。ここまでは朝鮮と同じであったと考えていいだろう。しかし四七年の二・二八事件を契機に、本省人対外省人という、台湾の戦後史を規定したエスニックな対立が形成されるにとめない、国語と台湾語の関係も政治的な意味あいを帯びてくることになる。国民党政府は台湾的なものを極力否定し、「中国」を唯一の価値として押しつけた。それは対内的にはエスニックな差別を正当化するものであり、対外的には共産化||ロシア化する大陸に対して、自らが中華文化の唯一正統な保持者であることを主張するためのものだった。歴史、地理、社会といった社会科学教育のなかでも、大陸の歴史、

地理ばかりを教え、台湾のことはほとんど出てこない状況がずっと続いた。教育のなかで台湾の歴史や地理を教えるようになったのは、今年からのことで、そのための教科書の内容をめぐる、激しい議論がここ数年続けられてきたことは記憶に新しい。国語政策もまたそうした国民党の政策の重要な一環だった。学校では体罰をとるような強制によって国語の使用を強いられ、台湾語は遅れたことばとして否定された。級長や学校代表を選ぶときにも、国語を流暢に話せることが条件のひとつとなるといった事態は、台湾語をしゃべる子供に、それは良くないこと、あるいはわりを食うことだと感じさせ、それがある種のコンプレックスとして内面化していくことになる。またテレビやラジオでも、台湾語の放送はごく短い時間に、厳しく制限されていた。

こうした政策の結果もあって、台湾の国語普及率は大変高い。今日では国語をまったく解さない人はほとんどないといっているだろう。台北などでは、親は台湾語を話していても、子供は家庭でも国語を話すというような現象は、もうしばらく前から見られる。だが社会的には台湾人と外省人が棲み分けてきた（それはエスニックな

差別によるものだ)ため、台湾人の場では台湾語が話され、それは依然として活気を保ってきた。

こうしたなかで、七〇年代からの民主化運動が、同時に台湾化の運動として現れてき、台湾ナショナリズムが高まってくるにしたがって、台湾語の復権要求が起ってきたことは、自然なことだといえる。選挙などでは台湾語で演説することが、それだけで人気と活気をよび、非国民党候補が民衆の支持を調達する重要な手段となった。八七年に朱高正が立法院(国会にあたる)の質疑を台湾語でおこない物議をかもししたことなど、台湾語を話すことが、それ自身抵抗としての意味あいを帯びるまでになったことを意味する。今日では外省人の、あるいは台湾独立反対を唱える政治家でも、選挙では台湾語を使わなければならないほど、台湾語は政治言語として優位化しつつある。こうした趨勢に対応するため、また八七年戒厳令解除、八八年李登輝の総統就任と、国民党自身が台湾化の方向に大きく踏み出したため、政府も台湾語容認の方向へ踏み出さざるをえなくなった。八七年には、学内で方言を話した生徒に、体罰、罰金等を加えないよう通達し、鉄道で閩南語の案内を行うことを決め、また

テレビでも閩南語のニュースの枠を設けた。また九三年にはテレビの方言放送の時間制限を撤廃した。

なかでも画期的なのは、台湾語等の言語教育の実施を認めたことだろう。八九年末の立法院選挙は、初の複数政党参加の自由選挙(民進黨は八六年成立)であり、李登輝就任後初の選挙でもあったが、ここで野党民進黨が躍進し、また同時に行われた地方自治体の首長の選挙でも七つのポストを手に入れた。民進黨の地方首長は共同で「双語教育(バイリンガル教育)」を主張し、政府も九〇年初めに課外授業、選択授業として行うことを条件にこれを認めた。同年六月には七自治体政府共催で、本土言語教育問題第一回學術討論会が行われ、九月には台北の金華国民小学校で、はじめての台湾語の授業が行われた。翌年には宜蘭県で、小学校一年から中学校二年までのすべての生徒を対象として、台湾語の授業が始まった。自由選択とはいえ、参加希望者は多く、評判はいい¹⁹⁾という。

日本の敗戦直後台湾の課題は、植民地支配を克服して新たに台湾を取り戻すこと、その新しい台湾をもって中国の戦後再建に参加すること、すなわち台湾の取り戻し

と、中国の取り戻しの二点であったろう。それが二・二八事件を契機に、台湾の取り戻しは禁じられ、その分だけ中国の取り戻しは押しつけとして感じられるようになったと考えられる。台湾の取り戻しはいわばその後の年月を、エネルギーを蓄積しつつ潜在してゆくことになった。こうして規制が解除されたとき、台湾語の復権要求は、大きく政治的な色彩を帯び、台湾ナショナリズムの情念と分かちがたく結びついたのである。だが八〇年代以降の台湾語の復権は、こうした政治的意味あいのみで説明できるものではなく、自らのことばで表現するという、ごくあたりまえの行為のなかに、あらためて自らのアイデンティティを発見あるいは確認するという、より広い文化的意義をも持っているように思われる。

八三年に公開された『坊やの人形（児子的大玩偶）』、『少年（小畢的故事）』の二本は、台湾映画のニューウェーブの到来を告げた画期的作品だが、ともにせりふに台湾語を用いた点でも画期的だった。以後映画では台湾語を用いることは、あたりまえのこととなってゆく。またポピュラー・ミュージックの世界では、歌謡曲（演歌のようなもの）は台湾語によるのがふつうだったが、若者

向けのポップスは国語によっていた。台湾に自前のポップスが生まれるのは、七〇年代のキャンパス・フォークあたりからだろうが、その旗手のひとり羅大佑も、時に台湾語をまぜることはあっても、基本的には国語で歌っていた。だが黒名單工作室（ブラックリスト・ワークショップ）が八九年ファースト・アルバム『抓狂歌（ソング・オブ・マッドネス）』で衝撃を与え、九〇年林強の『向前走』が爆発的にヒットしたところから、台湾語ロックがまたたくまに隆盛になってきた。⁽²⁰⁾

文学をふくめてこれらの例は、政治によって禁止されてきた分だけ政治的意味あいを帯びていることになるが、しかし政治のみによっては説明しきれない、多元的な価値、多元的な表現への可能性を持っているようにも思われる。そしてそうした多元的な価値観こそは、これまでの中国の文化にもっとも欠けていたものなのである。さらにいえば台湾語の復権要求にふくまれている政治的要素そのものもまた、政治の幅を超えて、そうした中国の古典的文化構造への挑戦としての意味を持っているのだと思う。だがそのことについては、稿を改めて考えてみることにしたい。

こう考えてみると、台湾の日本語文学と台湾語文学とは、いわば背中合わせの双子のような側面を持っている。

『台湾万葉集』が六〇年代に形をとりはじめ、八〇年代にある形を得たことは、偶然ではないのだ。わたしたちは『台湾万葉集』という植民地支配の遺産の向こうに、台湾の戦後という大きな背景を通じて、台湾語文学の形成の姿を透かしみることが出来る。そしてそれこそがいま台湾のもっともホットな部分のひとつなのだと思う。

- (1) 大岡信『新折々のうた1』岩波新書、一九九四年十月
- (2) 隅谷未喜男、劉進慶、涂照彦『台湾の経済』東京大学出版会、一九九二年二月
- (3) 陳千武「談」笠「的創刊」(鄭炯明編『台湾精神的崛起』文学界雜誌社、一九八九年二月)
- (4) 大岡信『新折々のうた1』『新折々のうた2』岩波新書、一九九四年十月、一九九五年十月、に収録。
- (5) 黒川創編『外地』の日本語文学選1南方・南洋/台湾、『同2満州・内蒙古/樺太』、『同3朝鮮』新宿書房、一九九六年一月、同二月、同三月
- (6) 垂水千恵『台湾の日本語文学』五柳書院、一九九五年一月
- (7) 佐佐木幸綱『異国の文芸』(『朝日新聞』一九九五年六

月一日夕刊)

- (8) 台湾総督府編『台湾統治概要』一九四五年、復刻版は、原書房、一九七三年六月
- (9) 戴國輝「某助教教授の死と再出発の苦しみ」(戴國輝『台湾と台湾人』研文出版、一九七九年十一月、所収)
- (10) 注9に同じ。
- (11) 鍾肇政「台湾文学について——『訳脳』の体験から」(『台湾文学研究会会報』十号、一九八五年七月)
- (12) 金時鐘「クレメンタインの歌」(金時鐘『在日』のはざままで)立風書房、一九八六年五月、所収)
- (13) 金石範「言語と自由——日本語で書くということ」(金石範『ことばの呪縛』筑摩書房、一九七二年七月、所収)
- (14) 注9に同じ。
- (15) 吳濁流『夜明け前の台湾』(社会思想社、一九七二年六月)
- (16) 人口の割合は、黄宣範『語言、社会與族群意識——台湾語言社会学的研究』文鶴出版有限公司、一九九三年七月、によった。
- (17) 林央敏『簡明台語字典』(前衛出版社、一九九一年七月)月、魏南安『台語大字典』(自立晚報社文化出版部、一九九二年二月)、許極燉『常用漢字台語詞典』(自立晚報社文化出版部、一九九二年六月)、陳修『台湾話大詞典』(遠流出版事業股份有限公司、一九九二年十一月)、胡鑫麟『分類台語小辞典』(自立晚報社文化出版部、一九九四年五月)

など。同じころ他に許成章『台湾漢語辞典』（自立晚報社文化出版部）があるはずだが、出版年は未詳。

- (18) 台湾語文学のあらましについては、林瑞明「台湾語文学発展の現段階とその意義」（大橋英夫、劉進慶、若林正文編『激動のなかの台湾——その変容と転成』田畑書店、一九九二年九月、所収）、林央敏『台語文学運動史論』（前衛出版社、一九九六年三月）、など。

(19) 以上は黄宣範『語言、社会與族群意識——台湾語言社会学的研究』文鶴出版有限公司、一九九三年七月、および

寺山末吉「台湾におけるバイリンガル教育の黎明」（『言語』二〇巻八号、一九九一年八月）によった。

- (20) 映画については田村志津江『台湾発見——映画が描く「未知」の島』朝日文庫、一九九七年六月、ポピュラー・ミュージックについては大須賀猛＋ASIAN BEAT S CLUB編『エイジアン・ポップ・ミュージックの現在』新宿書房、一九九三年五月、など。

（一橋大学教授）